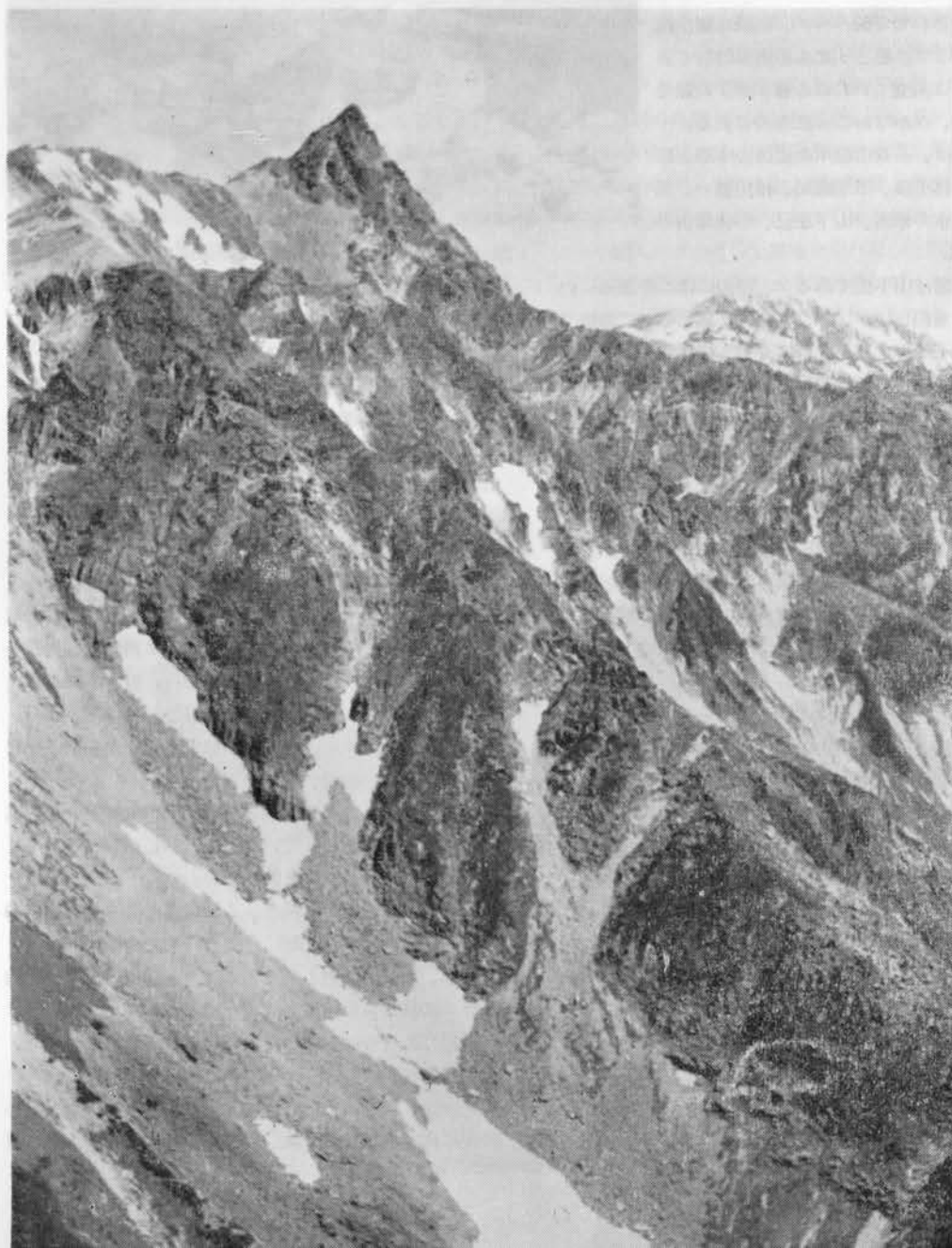


山と博物館

第4巻 第7号

1959年7月25日

大町山岳博物館



槍
ガ
岳

空、岩、雪、この色が人々を山にひきつけずにはおかない。そそりたつ岩峰にもはかりしれない魅力がある。

日本アルプス横断記

四十年前の針ノ木越え

高 須 茂

「日本アルプス横断記」一冊、といってもこれは刊本ではない。カーボン紙で謄写の上七部を作り、仲間だけに配ったプライベートな紀行なのである。

内容は大正9年(1920)7月の針ノ木越え立山登山記であるが、巻頭にキャビネ1枚、手札73枚を貼った写真ページがあり、序、本文、後記、あわせて80ページ。表紙は羅沙紙に白樺の皮でワクをとった水彩画を付してある。製本には糸立(いわゆる着ゴザ)の紐を用いており、なかなかこったものである。

この山行は、東京市役所の吏員を中心とした7名、小林英彦、市川政司、相川要一、田中源太郎、永井孝直、山下正巳、小林兼吉の諸氏である。

本文の筆者は山下氏であるが、冒頭にはこうある。いかにもものものしいが、そこに時代が感じられて愉快である。曰く「一夫之れを守れば万夫も抜き難しと称せられ天下の険を以て誇りし箱根の峻嶺も開け行く文明の風には敵し難く今や所有交通利器の爲め縦横に破壊され徒らに成金輩婦女子の遊山場と化し封建当時の面影聊として見るべからず。予茲地に遊ぶこと前後五回、回を重ねる毎に山としての価値漸次減び行くを歎ずるのみ、秀峯富士己に俗化し、榛名筑波の如き論するに足らず。只此際近年旅行家の間に頻りに喧伝さるる北日本アルプスの称ある信越国境山脉の連綿たるあり、其山容の雄大なる通路の峻嶮なる欧州アルプスに彷彿として仙境亦掬すべきものあり。予等の試練場として俟つものの如し」云々

大正9年といえは、日本山岳会が出来てから15年になり、その前年、田部重治氏の「日本アルプスと秩父巡礼」(後年増補して「山と溪谷」と改題)が出ているが、登山はまだ旅行であり、今日の登山ブーム時代からみれば、3000メートルの雲表に立つ者の数も寥寥たるものであった。もちろん登山案内書などというものは一冊もない。

この頃、針ノ木越えの立山登山をしようとするれば、相談相手はどうしても大町の対山館主百瀬慎太郎氏になる一行もやはり定石通り対山館に一書を飛ばし、書翰の往復によって計画を練った。この間の消息は略すが、7月10日、「月余に亘る楽しみ準備期を過ぎ」、「午後10時に飯田町駅に」一行は集合した。中央線の発駅が新宿となったのは、たしか昭和8年の7月15日である。(飯田



針ノ木谷

町発の最後の列車に乗った記憶がある。それが14日だった)それまでは待合室も板張りの、貧弱な飯田町駅から松本行に乗ったものである。

「11時発車」、煙突から火花を散らす中央線の夜行である。甲府駅で夜が明け、松本駅9時30分、ここで11時発の信濃鉄道大町行にのりかえ、大町着午後2時。——この時代のスローモーションぶりは、今の人にははじれたいであろう。

この日は対山館に一泊。信州トビ(ピッケル代用)、金カンジキ、着ゴザ、メンツ(弁当箱)、食糧などをととのえる。先達(案内人)に江津徳市、夫人に小日向梅次、日井周作、小日向政雄をやとい、7月12日、大町を発足した。この日は大沢小屋泊、13日、針ノ木峠を越えて、平ノ小屋泊、14日、ザラ峠を経て、室堂泊、15日、雄山登頂、弥陀ヶ原、松尾峠を経て、立山温泉泊、16日常願寺川沿いに藤橋へ出て、富山泊。

40年前のことであるから、この間の行程は、今日とはいろいろ様子がちがっていて面白い。しかし、それをここに詳しく紹介している暇はない。

われわれにとって興味があるのは、やはり当時の装備である。この紀行の記録によると、前記の信州トビは1円60銭、金カンジキ(紐とも)は1円80銭、着ゴザ40銭、メンツ50銭という値段も微笑を誘うが、ルックザックはないので雑糞を、水筒とともに左右の肩にかけ、夏服、足袋、草鞋がけといういでたちである。足袋は各自スベアを一足、草鞋は一行11名で50足(6円)を用意。それに天幕代用として、9枚つぎの油紙2組(18円)を大町



黒部へのトンネル入口

で購入している。ほかに雨外套、シャツ、モモヒキ、サルマタ、手袋、双眼鏡、カメラ、地図、磁石、時計、テープ、提灯、ローソク、懐中電燈、マッチ、やかん、煙草、小笛、扇子、小刀、細紐、紙、手帳、鉛筆、万年筆手拭、ハンケチ、風呂敷、糸針、毛抜、白墨、荷札、歯磨、楊子、瀬戸引茶碗、鋸、ナタ、細引、万創膏、鞆帯ウイスキー、ワセリン、アセシラズ、御百草、日章旗、香水、等々々。——いかにも大正という時代が感じられて面白いではないか。

食糧は、一行11名共同で、米2斗6升(12円62銭)、味噌1貫500匁(1円47銭5厘)、干鰯100匁(1円18銭)、干びよう100匁(40銭)、白すぼし100匁(80銭)、おぼろ昆布100匁(75銭)、するめ一肥(1円20銭)、鯉節(非常食として)3本(1円50銭)、角砂糖1斤(50銭)、茶(30銭)。このほか缶詰として牛肉5缶(5円50銭)、鮭5缶(2円50銭)、福神漬3個(75銭)、海苔佃煮2個(50銭)、鯛味噌2個(70銭)、等々々嗜好品としては、ビスケット、氷砂糖、堅パン、干ぶどう、ミルク豆、ドロップなどを各自で持参。

尚、装備のうち、夜間小

屋用の防寒具としてドテラを用いているのが微笑を誘うこれは対山館の厚意で、第一夜、一行が大沢小屋に泊っているところへ、人夫がこれを背負って追いついている。

当時として、以上の装備は最高のものであったといえよう。今日の神風登山者は一行の爪の垢でも煎じて飲む必要があらう。

交通費は飯田町一大町間、4円12銭、対山館一泊1人2円、室堂一泊1人2円、立山温泉一泊1人3円、人件費は先達1日、3円50銭、人夫、3円である。

以上、だいたい主なものをあげてみた。

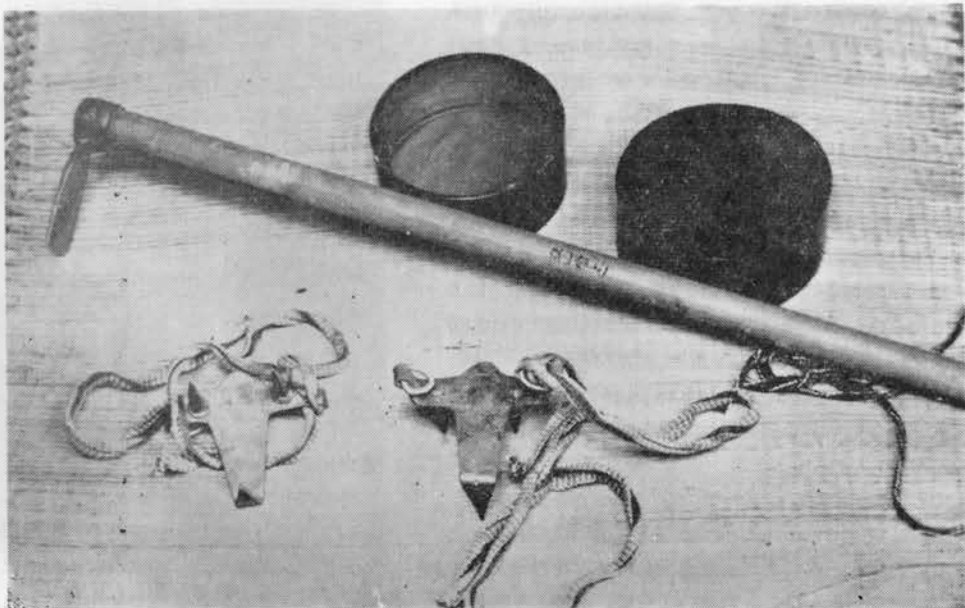
大正9年という年は、田中喜左エ門が初めて黒部川の上ノ廊下を通っており、野呂

寧が台湾の南湖大山の初登頂をしているが、すでに小島烏水、中村清太郎、田部重治、木暮理太郎の時代は終って、三田幸夫、大島亮吉、板倉勝宣、舟田三郎、藤木九三、今西錦司などの時代がはじまろうとしていた。

一般人がぼつぼつ上高地を訪れたした頃でもあるが、ともあれ登山家にあらざる旅行者が針ノ木一立山登山をしたというのは、やはりこの時代としては一つの記録たるを失わぬであろう。

現在の黒部までの道は、関西電力の工事により赤沢岳の横腹にトンネルがあげられ、大町からは道路が敷かれわずか二時間たらずで黒部に抜けられるとか。科学の発達にともない登山にも今昔の差著しいものがあり、目を見はらせるばかりである。

着ゴザの上のメンツ、信州トビ、カナカンジキ



初めて山へ登る人に

武 田 武

規則のないたった一つのスポーツが登山であるという
ようなことを言う人がいるし、そう解釈している人達が
以外に多い。これはとんでもない大きなちがいであって
登山にもルールがあり、そして登山程ルールを守ること
のきびしさを強要されるスポーツは他のあらゆる種目にも
みられない。何故ならば登山は自然を相手のスポーツ
であるから、自然と人間との関係を正しく見きわめ自然
界の法則に従わなければならない。これに反するような
ことがあれば、その人はたえず生命の危険にさらされな
なければならない。

スポーツだから積極性がなければならない。

弱い相手を負かして、それで満足しているようではス
ポーツと云えない。難しい山へ、難しい山へと次々に取
組んでいこうという態度がスポーツ登山の本来の姿なの
である。

近頃の登山のなかには、優れた体身と、優秀な装備を
もっていないがらの事故が後をたゞない。この間「山の会
」があり、ある先輩が、初めて登山をする人と、こんな
問答をしておいた。山にポータブルラヂオは必要かと聞
いた。

先輩答えて曰く、天気予報など知れて都合はよいけれ
ど、雨が降った時の雨具のかわりにはならないよ。

懐中電灯はどうかと問うに、

あゝそれは便利ではあるけれど、火をもすマッチの役
にはたゞないよ。と云っていた。

私はこの会話を聞いていて、先輩は初めて山へ入る人
に、一つの大きな教訓をしているのだと知った。これは
あくまでも極端な一つの例であって懐中電灯は山に不可
欠のものである。近頃のように立派な、用具、装備が出
来て、運動具店へ行けば、頭から、足迄のあらゆる装備
がまに合う。そしてこういった完全な装備を身につけて
いれば、山の事故は防げるかという、そうではなく年
々山で命をおとす人が多くなっている。

最近の遭難事故で感ずることは、装備が不完全という
よりも、むしろ完全で優秀な装備にたより過ぎて、自分
の実力以上の山を選んでの事故が非常に多い。

ピッケルの使用法がわからないで、グリセード練習中
に大腿部へピッケルを突き刺して重傷を負った例などもず
いぶん多い。

その他ハーケン、ザイル等身を守るべき器具がかえっ
てあだになっている。こうなると、気遣いに刃物を持た
せたに等しく、それを売った運動具屋さんをうらめしく
思う。どうかそんなことのないように、もちろん装備は

完全であることは望まれるが、それに綿密な計画と、自
分の技術の能力、自然にたいしての謙虚さがプラスされ
なければ登山者から危険は去らない。山が危険ではなく
して、危険は山へ登る登山者のなかにあるんだというこ
とをよく考えてほしい。

目的の山

山登りは今年ばかりでなく生涯のものであることをよ
く考えリーダーは隊員の体力に相応したプランを立て
る。

隊の編成

先づ考えなければならないことに、登山の不資格者が
おること。

高山の特殊性は人々の健康や体力にある程度の制限
を求めることは是非もない。

登山はあくまでも健康者のものであって病弱者は不
資格である。

出発前に医師の健康診断を受けて不幸を未然に防が
ねばならない。

リーダー

隊員の力の限度をよくわきまえて行動し、心の余裕を
失うようなことにでもなると、形勢はますます不利に
なる。

悪天候には無理をせず、隊員が過労に陥らないように
注意を怠ってはならない。

装備

衣類 上衣もズボンも特に登山用に仕立てなくても良
いが、ポケットを多くし、雨蓋をつければ都合が良い
山の天候は変わり易い

雨具は重要なものの一つである。今出まわっているビ
ニールの雨具は軽くて良いが少々むれると云う欠点か
ある。肌着は必ず着替を用意し泊り場についたら乾い
たものと替えるようにしたい。靴下は毛の厚手のもの
がほしい。これは、防寒用ではなく、靴ずれの予防と
してはくのであるから、しわが寄らないように気をつ
つける。

又防寒用としてセーターかジャンパーが欲しい。

靴 履物は登山靴が一番良いが、編上型のズックの運
動靴か、地下タビでも結構。

登山用具

夏山に冬山用の八本爪は大きすぎる。四本爪のもの
か三本爪のもので充分である。又雪渓のある所ではピ
ッケルか又は金剛杖のようなものがほしい。

ピッケルは雪のある所で使用し、それ以外の時は頭部

にカバーをかぶせておくのが安全である。

小屋泊り

山小屋は休息所であって、娯楽場ではない。混雑した場合にはお互いにゆずりあい、病人や特に疲労の甚しい人には良い席を与えていたわりたいものである。各自の所持品は、良く整理し紛れ易い品物には標識をつけたい。又素泊りの場合にはキャンプの注意に準じ火の用心や跡仕末は勿論のこと、ハイマツなど切って薪の代りにつかわないようにしたい。

食糧

この頃では種々の携行食が出まわっていて至極便利である。

ことにはじめての人にとっては山小屋の御飯は小屋で出してくれるお菜だけでは食べられない人もあるから自分の好きな食品をリックの底にしのはせていくのも良いと思う。

弁当は各人で自分のものは持ちたい。残っても捨てずに一応小屋に着くまでは持って行くようにする。

不時の場合を考えて非常食として1食分位の食糧は持って行きたいものである。

保健

はじめて山に登るような人には、時々おこる高山病であるが、これは標高の低いところにおろせば不思議な位、早くよくなるものである。

その他に、日射病がある。小さな登山帽で長い間炎

天下を歩いているとおこる。

手拭でおおいをするとか、麦ワラ帽子をかぶるのも良いと思う。

山に行けば、汗をかいたり、雨にあったりすることが多いので、かぜをひきやすい。普通のかぜと違って症状がひどく、特に寒け、ふるえ、関節痛、腰痛など伴う時は流感の疑いがあるから他人にうつさないよう注意が必要である。

かぜからは特に肺炎になりやすいから絶対に無理はしないようにしたい。

又山に来ると食物や水が変わるから下痢や腹痛を起しやすい。雪溪の雪を食べたり、谷川の水を飲みすぎないように注意しないとイケない。雪を食べれば食べるほどのどがかわき、口の中も荒れる。水が必要な場合は雪を溶かして使用するようにしたい。

ザックの背負紐などの圧迫による手足のむくみは心配ないが頭痛、動きがあり尿の量が少なくなる時があるが下山すれば勿ち尿が増えて良くなる。

マーキュロとかガーゼ、包帯などすり傷用に個人で持って行くのも良い。しかし骨折などになると素人には処理できない場合がある。こんな場合は急緊処置をほどし山小屋の人達に助けを求めてすみやかに、病院などに収容する。要はそのようなことが起らないようにすることである。 (大町山の会々員)



オオヨシキリの巣とヒナ

オオヨシキリ

長 沢 修 介

姫川源流の白馬村神城地域の湿原帯には各所に一面背丈を没するヨシが密生している。

そのヨシ原で来る日も来る日も朝から晩迄やかましく鳴いているのがオオヨシキリである。このオオヨシキリはこの地方には5月初旬頃に渡って来るがその頃はまだヨシが十分に伸びていない。そこで附近の藪や雑木林などを鳴き歩いてヨシ原の一角に自分の「なわ張り」を宣言する。こうして毎日毎日「なわ張り」の歌をくり返しているのがヨシが伸びきる頃には翼はヨシの葉ですれてかさかさになり声もガラガラ声になってしまう。

巣はヨシの茂の中に丈夫なヨシ2~4本を支柱としそれに枯葉をからませた深いオワン形の吊巢でその中に淡青色の地に大小の斑点のある卵を3~6個産み込む。

ヒナが大きくなり巣立ち近くなると巣の縁に佇んでじつと上の葉を見つめているがやがてピョンととび上る。そしてその葉から又上の葉を見つめてとび上る。こうして上へ上へとばかりつめついにヨシ原の上に出て自由に羽ばたく日を迎えるのである。

雪を
彩る

氷雪植物について 5

長野県白馬高等学校教諭 小野 貞 雄

③ *Chlamydomonas nivalis* について、光線とヘマトクローム及び葉緑体の消長に関する実験を試みて見ました。材料は雨飾、猿倉、白馬尻にて採集しました *Chlamydomonas nivalis* を主要素とする、血紅色の赤雪を選びました。方法としては、採集日に検鏡したものと、これを暗室に入れて5~10日後に検鏡したものとを比較して見たその結果、前者は細胞内にヘマトクロームが充満し赤褐色を呈しおり(第22図)、後者は第23図の如くヘマトクロームの量が少なく、細胞の真中、或は囲に緑色の葉緑体が現われたものや、黄赤色の油脂と思われるか粒体を持った細胞を、多数観察されました。これは光線の遮断により光線防止用のヘマトクロームが不必要となり消失或は一部油脂に変わり、このために潜んでいた葉緑体が現われたものと思います。

光緑と色素とに関しては更に、実験観察を続け、検討をしなければならぬと思います。

(C) P・H及び温度

次に筆者が雨飾国有林地内の着色雪について測定したP・H(ペーハー)(水素イオン指数)及び温度について、参考までに記して見ましょう。

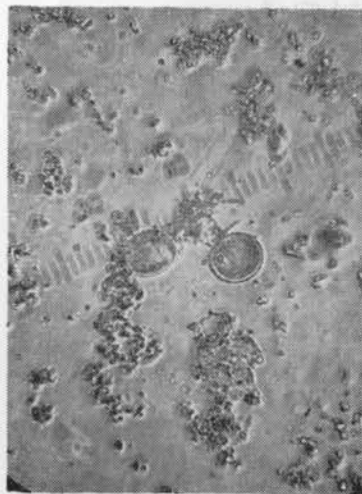
赤雪はP・H6.0~6.4、緑雪P・H5.8~6.2、黒雪P・H6.2であります。その附近に於ける白雪及び池の水は共にP・H6.8で、着色雪は酸性を好み、有機質に富んだ雪渓に発生するようです。

次に温度について見ますと、気温15~20°Cに於いて測定した結果、どの着色雪にも0.1~0.3°Cでありました

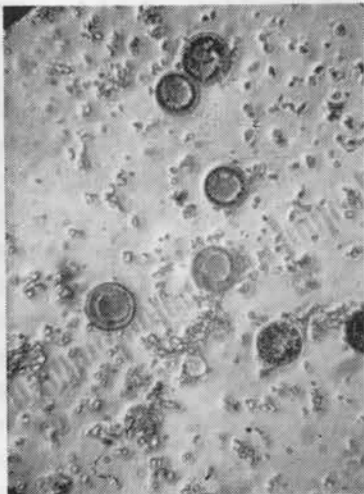
着色雪は0°Cより幾分温度の高い所を好むようです。氷雪植物の生活史については判明致しておりませんが、ここに *Chlamydomonas nivalis* について観察した結果を記してみたいと思います。

形態の項でも記しましたように、雪中から見出される胞子は厚膜胞子ですが、遊走子は我国では観察されていません。外国にて観察した結果によりますと、温度の上昇に共ない不活発となり、遂には鞭毛を失い薄い膜をもった厚膜胞子と変わり、しかもこの遊走子は4°C以上の温度には耐え得られないと報告されていますが、筆者が観察した結果は、これとは全く反対で雨飾、猿倉、大雪溪のベタ雪より採集した赤雪、或は実験観察のために保存し融解せる赤雪を観察したものに、厚膜胞子内やその周辺に、精子のような形の、径2.5ミクロン位の頭部と約4~5ミクロン位の鞭毛を有し、活発に動かして泳ぎ回っている遊走子なるものを多数観察しました。(第24図)もしこれが遊走子とすれば、雪渓が融解するに従い、厚膜胞子から鞭毛を有し活発な運動をする遊走子と変わり、水中に泳ぎ回り、10月下旬頃の降雪期に再び雪中に戻り鞭毛を失った厚膜胞子になるであろうと推察致します。これらについては、更に観察し生活史を解明致したいと思ひます。

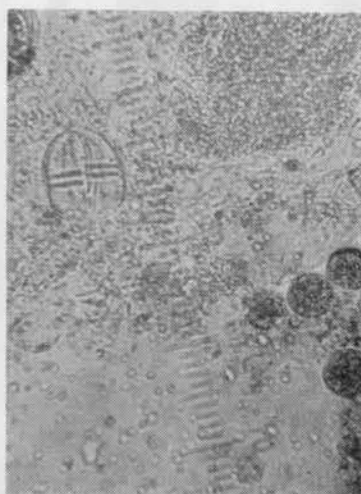
雪を彩る氷雪植物については、まだまだ未解決の点が沢山あって、もっともっと研究をしなければならぬのです。氷雪植物は今後に残された興味ある、面白い研究の出来る課題の一つなのです。



22図 採集当日の *Chlamydomonas nivalis* (細胞内にヘマトクロームで満されている)



23図 暗室に貯蔵せる *Chlamydomonas nivalis* (細胞内に葉緑体が現われている)



24図 *Chlamydomonas nivalis* の厚膜胞子(円形のもの)より出た多数の遊走子

リス日記

黒柳秀男

四月の十八日は土曜日で、年下の小学二年生の娘がPTAに出席した母の留守に代ろうと帰って来て、台所の戸をあけましたら、リス君土間に落ちて死んでおりましたそうです。一週間ほど前から下痢便(後述)で尻毛に便がついては、肛門をふさぎますので私か家内が三、四回づつ拭きとってやっておりました。その日も朝出がけに私は一度拭いてやりました。昼近く家内が出る時肛門を見ますと、余りついておりませんでしたので大丈夫と思っただけでそのままにしました。

それがいけなかったのです。娘がお尻を見た時は一杯ついていていたそうです。二時間ぐらいの間なのに。きっと排便のできない苦しさに、台所をはいまわり(後足を痛めていました)土間に落ち、そこをはいまわって死んだのでしょう。娘はすぐ次いで帰って来た六年生の姉と二人でせめて死骸を両親に見せまいという思いやりから、庭の東北の隅に深い穴をほって、埋葬しなさやかな塚を作って十字架を立ててやったのです。

私帰って参りまして、かわいそうな事をしたねと申しますと「そんなのよ。私はもう何が何んだかわからないけれど、涙ばかりでるの、顔を洗ってもまだまだ出て来るのよ」と二年生の娘は、しおれかえっておりました。

家の中で放し飼いにし、手渡しで食物をあたえ懐にだいて近所を遊んでまわっていた年下の娘は自分の弟や妹が逝った時はこんなに悲しいものなのと問ひ顔でした

昨年九月二十八日、生後二カ月目だとの御説明をうけて頂いて参りました。二カ月にもせよ罎の中に入れて、観客に接しておりましたためか、なかなか私共になれませんでした。

逃がすといけないと大事をとりまして、少し大き目の鉄製の鳥籠に、ワラを一杯入れて育てておりました。暖かい廊下で日射をうけておきましても、憶病なためかよくワラの中の穴の中に入っておりました。そっとしておきますと、穴からでて餌を食べ止り木をくるくる廻って元気よく遊び、夜は籠を毛布一単にくるんで子供たちの枕もとにおきますと、ゴソゴソ音をたてて動き、やがて雨音にも似た響を立てながら落花生のカラを食いやぶっておりました。

夜中にふと雨かと思うと、枕もとのリス君の夜食の音これはほとんど毎晩のことでした。

餌は落花生と人参、さつまい芋の輪切、クルミは三、四日おきに二粒くらい。ところが水は一滴ものんでくれません。おそらく毎日必ずあたえた新しいリンゴの輪切、

これを水がわりに食べているからだろうと思いました。余りにも水を飲まず、その上毛を濡すばかりですから11月のはじめごろから「水入れ」は取りだしてしまいました

手を入れてリスをなせようとして、私は何回も手をかまれて、血をだしました。なかなか私共の気持がうつって行きませんでした。手を入れるとクックとするとどく鳴いてさっと口を近づけます。

でもやっと11月のなかばごろ馴れはじめました。最初にかまれずに頭をなせることができたのは六年生の娘でした。

それから半月ほどして下の娘ももてるようになりましたやはり動物は異性になつきやすいのかとフロイドの性慾説を考えてニヤニヤ笑っておりました。

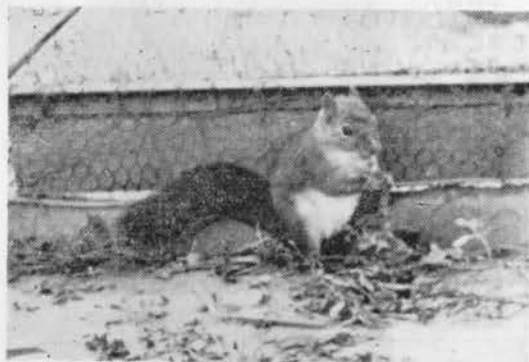
12月頃から、よく爪を籠やワラにひっかけて身動きができず困っていることが目立ってまいりました。はじめ爪がのび過ぎたのかと思っておりましたが、やっと後足が不自由であることがわかりました。

その頃は私もどうやら信用を得て来ましたので、そっと後足をマッサージしてやりました。しかし一向に良くなりません。

そのうちに運動不足になることを恐れましたので、ひと思いに籠をやめて放し飼いにしました。冬のことで戸じまりしてありますので外部からの動物の侵入は大丈夫なので、台所の板の間に平たい木箱にワラを入れて巣を作ってやりました。しかしリス君はその箱の中で何か落ちつきませんでした。

そのうち或る日一番家中で動物好きの妹が「リス君寒いよ」と自分の着古した赤い毛糸のカーディガンを折って入れてやりましたら、彼いきなりその中にもぐって大変満足そうようすでした。

それから幾度もワラの穴とカーディガンの下とどちらを好むかとくらべますが、何日でもリスはカーディガンの方に入ってねてしまいました。「やっぱり私の匂いが



お母さんに似ていたのよ、きつと」と娘はひどく得意でした。しかしこれは毛糸の方が肌ざわりがよかったからでしょう。

リスは箱からでたがりませんでした。

子供たちは不満で、時々箱からだすのですが、彼はすぐ後足をひきずるようにしてその箱に入ってしまう。余り運動はしません。こんなふうですが食欲は盛んで、よく食べました。二年生の娘は「リス君はいいね学校へ行かないで、宿題もなくて、おいしいものばかり食べて」とうらやましそうでした。子供たちはパンやビスケットふうの菓子も少しずつ与えているようでした。

三月の末頃、余り足がひどくかわいそうでしたので友人の獣医のもとにつれて行きました。しかしこうした小動物を手がけたことがないので結論もでません。結局カルシウム不足のために骨をいためただろうと刺戟の少ないカルシウムをもらってまいりました。パンにつけた口先の先にぬりつけたりしてのませました。そのうち一週間ぐらいうすぎたころだったろうと思います、のませています間にはじめて軟便をいたしました。ここで気がつけば良かったのですが、そのまま毎日のませているうち下利便に近い軟便もありましたので、心配になりもう一軒の知人の獣医に診察を求めました。ここでは、軟便は多分カルシウムの刺戟だろうと云われましたので、驚

いてやめてしまいました。そして指示にしたがって、総合ビタミン剤をなめさせるべく用意にかかりました時、前述のような事で殺してしまいました。

私も二年ほど獣医学校の経営をいたしましたことがございますので、素人ながら動物は好きで、飼いならしくはいたしますけれど、病気になるれますと、全然手づかすかわいそう、かわいそうで冷静な治療を考えてやれず失敗してしまうのですが、今回も再びその轍をふみました

子供たちはなかなか悲しみを忘れず、今も朝に晩に「リスお早よう」「リスおやすみ」とリスの墓の方えよびかけております。ちよつと、正気の沙汰ではありませんけれど、私も女房もふと台所の隅の空白に「アッリスがない」と思って、ハットすることがございます。「いやだな、忘れてしまう」とリスが生きていて、どこかへ逃げて行ったように思って、ハットするんですよ」と時々女房が愚痴ります、女房はそのくせリスを飼うことに一番反対した立場だったんです。

「お父さん、まだ大町でリスの子生れないかしら」と子供たちは思いだしたように淋しそうです。今日はリスの墓の上にまいた、朝顔の若葉が、朝雨にぬれて、とんで来たカエルの傘のような形でした。

(信州大学教育学部教授)

博物館友の会

博物館友の会では、山の自然に親しみながら自然に対する理解を深めるために、八方山研究登山を計画しています。

八方尾根は晴れた日には、遠く妙高、黒姫、飯綱、焼山、戸隠山が、更に遠く東、雲のかなたに浅間の噴煙が見え、八ヶ岳、富士山がかすんでおります。近くには白馬三山、五竜岳、鹿島槍がかまえております。

又尾根のいたるところにお花畑が展開されその花の美しさが、山の空気を一層すんだものになっているようです。大自然の中にとけこんで、自然科学の勉強を一しょにしましょう。

主催 山岳博物館 博物館友の会

対象 博物館友の会々員(小学四年生以上)

日程 8月12日 大町6時30分集合—四ツ谷—細

八方研究登山

野—黒菱(キャンプファイアー)

8月13日 黒菱—八方池—黒菱—細野—四ツ谷—大町(解散6時30分)

募集人員 100名

宿泊場所 黒菱ヒュッテ

個人経費 宿泊 350円 ケーブル(片道だけ)91円
 汽車賃(往復)団体60円 雑費19円
 計520円

指導 博物館学芸部

持物 雨具、セーター(防寒用) 衣類着がえ 水筒 手ぬぐい ちり紙、洗面具 弁当1食分、米5合 筆記用具、採集用具

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第4巻第7号 1959年7月25日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211
 大町山岳博物館

印刷所 大町市上中町
 信州印刷大町工場